

初級編

「加賀ふるさと検定」受験生のためのテキスト

専門テーマ「九谷焼」

今年度の検定試験（初級）は、全部で60問ですが、このうち50問は歴史・自然・方言などからの総合問題、10問は専門テーマであります「九谷焼」からの出題となります。

「九谷焼」をテーマとした問題は、①古九谷の始まり ②再興九谷の歴史 ③著名な九谷焼作家 ④九谷焼に関する遺跡や展示館などを素材とした問題が予定されています。これらに関することをあらかじめ勉強しておく、初級合格に大変有利となるでしょう。

古九谷の始まり

伝承によれば、大聖寺藩初代藩主の前田利治は、領内の九谷村で鉱山を開発中に陶石が発見されたのを契機に、鉱山開発に従事し錬金の役を務めていた後藤才次郎を肥前有田に派遣して陶業技術を学ばせたと言われています。後藤は帰藩後、九谷の地に窯を築き、田村権左右衛門を指導して、明暦元年（1655）頃に色絵磁器生産を始めた。これが九谷焼生産の始まりとされています。

その後、この事業は2代藩主利明が引き継ぎましたが、この時期に焼成された作品は「古九谷」と呼ばれ、焼き物の中では高く評価されています。

古九谷は、力強い呉須の線描の上に、紫・緑・黄・紺青・赤の五彩を用いて、絵の具を厚く盛り上げて描くことが特徴です。作品は花鳥、山水、風物を題材に豪放な味わいを醸し出していますが、一定の画風というものとは存在せず、極めて変化に富んでいます。また、赤色を全く使わず、紫・黄・緑・紺青のうちから2色または3色で、「塗埋手」の手法で描く「青手」と称する古九谷は、

大胆なデザインのものが多く、見る人に強烈な印象を与えます。

## 古九谷廃絶の経緯

溢れんばかりのエネルギーを放った古九谷ですが、約 50 年で突如として姿を消しました。廃窯の時期については一般的に元禄年間とされていますが、詳しい事情を語る文献資料は残っていません。現在、発掘調査の結果をもとに、廃窯年代を推定で宝永7年（1710）頃としています。

廃窯の原因は、確かなことは分かっていませんが、延宝3年（1675）大聖寺藩内の凶作、天和2年（1682）大聖寺江戸藩邸に大火、また貞享3年（1686）頃からの大聖寺藩の財政悪化などにより、多額の経費を必要とする九谷陶業の廃止に結びついたのでないかと考えられています。

また、事業を推進してきた2代藩主前田利明やが製陶技術の責任者だった後藤才次郎忠清が死去したことなども廃窯に拍車をかけたと考えられています。

さらに元禄3年（1690）以降は、伊万里色絵の黄金時代が始まり、日本海西廻り航路の整備もあり、伊万里焼が国内各地へ販路を広げました。この伊万里の流通の圧倒的優位に押されたことも大きな原因だと考えられています。

## 再興九谷焼の歴史

古九谷が廃窯して約 100 年後、金沢の春日山で窯業が再興されたことを機に、大聖寺藩領内でも九谷焼再興の動きが起きました。

吉田屋窯（1824～31）は、大聖寺の豪商、豊田伝右衛門が古九谷再興をめざし、古九谷窯に隣接して窯を築きました。その後、九谷の地では不便だということで、山代に窯を移しました。吉田屋窯で焼かれた九谷焼は、青手古九谷の「塗埋手」を踏襲しており、「青九谷」と呼ばれています。

一方、休業した吉田屋窯を買収し再興させるのが宮本屋宇右衛門です。宮本屋窯（1832～59）の主工、飯田屋八郎右衛門は絵付に主力を注ぎ、赤絵細描の優品を焼成した。この窯の赤絵細描の画風を「八郎手」、または「飯田屋」と呼ばれています。

このほか、大聖寺藩が山本彦左衛門に命じて江沼郡松山村に築かせた松山窯

(1848～72)がありました。名陶工の粟生屋源右衛門らを招き、主に藩の贈答用品を作りました。

## 著名な九谷焼作家

浅井 一毫 天保7年(1836)～大正5年(1916)

陶芸家。藩士浅井長右衛門の二男。本名幸八。宮本屋窯で九谷焼の絵付けを学び、赤絵九谷の名工となった。竹内吟秋の実弟。

竹内吟秋 天保3年(1832)～大正2年(1913)

陶芸家。大聖寺藩士浅井家の長男であったが、竹内家の養子となった。飯田屋八郎右衛門や塚谷竹軒などから絵や焼き物の技術を学んだ。のち私学校「維新舎」を設立し陶画工を養成。明治12年九谷陶器会社を設立し総支配人となった。赤絵と古九谷風の色絵が巧みであった。墓所は松縁寺。

中村 秋塘(初代) 慶応元年(1865)～昭和3年(1928)

陶芸家・赤絵細描の名手として知られる。本名亀次郎。父から陶画を学び、明治10年家業を継いだ。のち竹内吟秋に師事し、陶技を修得。赤絵細描の名手となり「磁質手」をのみだした。

北出塔次郎 明治31年～昭和43年(1898～1968)

兵庫県生まれ。勅使村字栄谷の九谷焼窯元北出家の養子となる。大阪美術学校日本画科に入学、矢野橋村に師事。また色絵陶磁研究のため、北出家を長期間訪れていた富本憲吉に影響を受ける。昭和21年(1946)工芸美術石川塾を開講。多くの子弟を養成する。ひき続き、金沢美術工芸専門学校設立に参画、その後、金沢美術工芸大学の教授となる。昭和43年(1968)九谷ではじめて芸術院賞を受賞する。

初代 須田菁華 文久2年～昭和2年(1862～1927)

金沢の泉町に生まれる。本名与三郎。明治13年(1880)石川県勸業試験場の陶画部を卒業後、京都で製陶を学ぶ。明治16年(1883)九谷陶器会社に招聘され、山代に移る。会社解散後、独立し、明治39年(1906)には菁華窯(登

がま 窯)を築き、染付、祥瑞、呉須赤絵などの作品に腕をふるう。大正4年(1915)、山代温泉に滞在していた北大路魯山人に陶芸を指導した。のち、魯山人は「私は須田菁華に教えられた」と話している。

## 九谷焼に関する遺跡や展示館

### 九谷磁器窯跡（国指定史跡）

山中温泉からさらに大聖寺川に沿って上流域に九谷町がある。現在はダム建設のため、すべての住民は移住し無人となっている。この九谷集落の大聖寺川を挟んで対岸の山の斜面に、江戸時代前期の窯跡2基と江戸後期の窯跡1基が確認されている。江戸前期の窯跡はいずれも連房式の登り窯跡で「古九谷」を焼いた窯跡と考えられる。また、江戸後期の窯跡は、古九谷を再興しようとした吉田屋伝右衛門が開いた吉田屋窯跡とみられている。一方、九谷集落跡の「九谷A遺跡」からは色絵窯があったと推定される遺構も確認された。

### 右川県九谷焼美術館（大聖寺地方町）

江戸時代初期の彩色磁器「古九谷」をはじめとして、およそ350年にわたる九谷焼の名品を展示する美術館です。

「青手の間」「色絵・五彩の間」「赤絵・金襴の間」と九谷焼を様式別に分け、各展示室を回廊式に配置し、雰囲気の異なった空間で鑑賞できます。デジタルライブラリーでは収蔵品をはじめ、全国の美術館で所蔵する古九谷の名品など約200点を見るコーナーも充実しています。

また九谷焼美術館は「古九谷の杜・親水公園」内にあり、公園と一体化し、光と風を感じながら、四季折々の美しい姿を楽しむことができます。

### 九谷焼窯跡展示館（山代温泉）

現代九谷焼のルーツである再興九谷吉田屋窯以来の窯跡（国指定史跡）を発掘、整備し、その遺構を公開している展示館です。

敷地内には九谷焼の窯として現存最古の本焼窯が残る窯小屋があります。さらに江戸後期の古材を利用して明治中期に建てられた九谷壽楽窯の旧母屋兼

工房こうぼうが展示棟てんじどうとして活用されており、九谷焼くぐやけいの製作工程せいさくこうていや歴史れきしが企画展けいかくてんなどによって魅力的みりょくてきに紹介しょうかいされています。また、蹴りけろクロろくろや絵付けえつけ体験たいけんコーナーコーナー（要予約ようよやく）もあり、九谷焼のオリジナル作品オリジナルしゆひんを作ることもできます。